「独の文学を草して井箆節三に交付す」：「鴎外日記」一九一十二12月二十日の記述をめぐって

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2007-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 須田, 喜代次 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1346

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

「独の文学を草して井箆節三に交付す」

――「鷗外日記」一九一二年十二月二十日の記述をめぐって――

須田喜代次

はじめに

一九一二（大正元）年十二月二十日の森鷗外の日記に、次のような記述がある。

二十日（金）、陰。泥濘。増師意見書を田中義一に交付す。独の文学を草して井箆節三に交付す。（略）

日記はこの日鷗外が「独の文学」なるものを「草し」、「井箆節三」なる人物に「交付」したことを告げている。ここで鷗外が、「独の文学を草し」たとしていることにまず注意しておきたい。当然と言えば当然だが、彼がその日記中に「草す」という言葉を記すのは、自分自身が執筆した文章の場合だけである。

たとえば、この年に限っても、九月十八日、乃木希典殉死事件に触発されて一気呵成に書き上げた「興津弥五右衛門の遺書」（『中央公論』一九一二・十）の脱稿は「興津与五右衛門（ママ）を艸して中央公論に寄す」と書き留められるし、十二月七日には「ながしを草し畢り博文館へ、老人を訳し小林愛雄に送」ったことが書き記されている（「ながし」は一九一三（大正二）年一月『太陽』に掲載）。もちろん全てに「草す」という言葉が使われているというわけではない。「羽鳥千尋」（『中

央公論』一九一二・八）は「羽鳥千尋を稿し畢る」（七月十七日）であるし、「田楽豆腐」（『三越』一九一二・九）は「夜田楽豆腐を書き畢る」（七月二十一日）でもある。しかし繰り返すが、「草す」とその日記に記されるのは、鷗外自身が執筆した文章であることは間違いない。それは文学作品に留まらない。先の十二月二十日日記に見える「田中義一に交付」した「増師意見書」、それは前日の十九日に「増師意見書を草す」とされたものであるし、さらに彼は「岡次官市之助、田中義一が為めに兵備の緩急に関する詔勅を草す」（同年十二月十六日）ことまでしている。

以上確認したような事実を前提とするなら、先の十二月二十日の「鷗外日記」に書き記された「独の文学」は、当然鷗外の手になるものと言わなければならない。しかるに、現岩波書店版『鷗外全集』全三十八巻には、それに該当する著述を見出すことができない。この『鷗外全集』未収録である「独の文学」の在処とその本文を呈示すること、それが本稿の目的である。

Ⅰ　英文通信社

探索の手がかりは「井箆節三」にある。とは言っても、たとえば人名事典の類に彼の名を見出すことはできず、生没年等のその詳細は明らかにし得ない。ただ現在国立国会図書館には、一九二二（大正十一）年実業之日本社刊行の『精神分析学』から、一九四七（昭和二十二）年好学社刊行の『理想国家物語』まで、編著を含めて都合九編の井箆著書が架蔵されており、後に彼が文筆家となったことを確認することができる。

さて、鷗外がその井箆に「独の文学」を「交付」した翌日、一九一二（大正元）年十二月二十一日の「鷗外日記」に、彼は再び登場する。

井原節三（箆）英文通信社より礼に来たり。

「井箆」と書くべき所を「井原」と書いてしまっているところからして、鷗外は彼とさほど懇意にしていたわけではなさそうだ。因みに「鷗外日記」への「井箆節三」の登場は以下に述べる二日を含めて、この一九一二年十二月中の都合四日のみである。（青田寿美「『鷗外全集』第三十五巻　日記索引（人名篇）」（『森鷗外研究9』二〇〇二・九、和泉書院）に拠る）。とまれ井箆はこの日「英文通信社」の使いとして鷗外のもとを訪れている。すなわちこの時点で、井箆は英文通信社社員であったと思われる。「礼に来たり」とあるが、あるいは原稿料を持参したのでもあったろうか。

その「英文通信社」だが、それは日露戦争後、望月小太郎[1]（一八六五―一九二七）により創立された出版社だった。社長望月小太郎の命を受け、井箆が最初に鷗外のもとを訪れるのは、この日を遡ること十日余、同年十二月十日のことである。

井箆節三望月小太郎の紹介に由りて来しに面会せざりき。

二人が実際に顔を合わすのは翌十二月十一日だった。

井箆節三を引見す。

この日に原稿の依頼がなされたのだろうか。だとしたら脱稿まで十日なかったことになる。が、正式の原稿依頼はこの時であったにしても、望月小太郎側からの鷗外への接近はもう少し前から確認することができる。

この年（一九一二年）がまだ明治四十五年と呼ばれていた六月の二十五日、まず次のような動きがあった。

望月小太郎の使に服部活民来訪す。現時の独逸の事を語る。

これが望月側からの最初の接近である。ここに「現時の独逸」という情報がある。さらにしばらく時をおいて二度目の望月からの接近が日記に記される。それは年号が大正と改まった後の、同年十一月二十八日のことである。

村上猶太郎望月小太郎の紹介を以て来訪す。「現時の独逸」を編輯する事に関して云云する所あり。

今度は村上という社員が鷗外のもとを訪れている。そしてこの日から十日余り後の十二月十日の井箆来訪に繋がるわけ

なのだ。右の十一月二十八日記事には「「現時の独逸」を編輯する事」とあるので、「現時の独逸」が書名であることが分かる。この書物の「編輯」に関して、望月は鷗外に何らかの相談を持ちかけていた。そしてこうした一連の動きの延長線上に、鷗外「草」するところの「独の文学」が結晶することになったに違いない。

ところが管見に入った限りでは『現時の独逸』という題名の書物はない。ないのだが、しかし望月小太郎は、鷗外が当の「独の文学」を井箆に交付してからおよそ一月後の一九一三（大正二）年一月二十八日を発行日として、他ならぬ英文通信社から、「現時の独逸」ならぬ『独逸之現勢』と題した千百頁にも及ぶ大著を刊行しているのである。以上の経緯を勘案するなら、「現時の独逸」という書名は最終段階で「独逸之現勢」に改められた、そう判断していいのではあるまいか。

Ⅱ　『独逸之現勢』

「大正元年十二月下浣」の日付を記す「自序」において、望月は本書刊行の意図を次のように述べている。

夫れ世界列強中我が帝国と等しく僅かに半世紀を出でずして一等国に進みたるを独逸となす。今や独逸は世界の覇者たる大英国と相対峙し相下らざるの勢ひあり。而かも其建国の歴史と国民の特性とほ（ママ）頗る我が国に酷似す。則ち著者は此次の歴遊中に於て深く自ら感激する所あり。抑も独逸は如何にして斯る隆運を得たるか、日本は如何にして其国運を進展すべきか。是れ実に痛切に著者の胸臆を衝き来る疑問なりき。以為らく日本の欧米に学ぶべきもの必ずしも列強中に於て特定の国を選ぶの必要なしと雖も、寧ろ開国維新の年所を同ふせる独逸発展の全体に対して之を研究するの優れるに如かざるなりと。

二年前の一九一〇（明治四十三）年の欧米諸国視察の体験を踏まえて、望月はドイツこそ今後の日本が学ぶべき先達の国とする。そのために政治、経済、軍事、外交、文化等々多方面に亘るドイツの現状を、「一面には予て此の計画を諮りた

る独逸の諸大家に其の寄稿を依嘱し、他面には広く独逸に関する海外の書籍を蒐集し、爾来一年有半を閲して英米の書籍は著者自らこれを渉猟し、独逸の書籍は社友之を訳出し」という形でまとめあげたのが本書ということになる。一九一三（大正二）年一月刊行の初版から時を置かずに同年四月に刊行された再版の巻頭には、各新聞紙上に掲載された初版に対する批評が一括紹介されているのだが、そのうち三月八日付『東京日々新聞』が言うところの「日本語を以て著はされたる精密なる『独逸に関するエンサイクロペデイア』と云ふべし」という趣を本書は確かに有している。

その構成は、「第壹章　総論」を皮切りに「第十三章　日独国交と両国識者の意見」までの全十三章に、「余論」と題する章を付け加えた形となっている。その第十三章には日本側の「識者」として山県有朋、桂太郎、青木周蔵、末松謙澄、青山胤通ら、鷗外ともなじみの人々を含む十三名の「意見」が並べられている。鷗外もそれら「識者」のうちに加えられてもよかったのではという思いも抱かせられるが、鷗外の名はない。

実は第十三章に鷗外の名がないだけではない。本書にはどこにも鷗外、もしくは森林太郎の名は出てこないのである。では本稿でわたくしが問題にしようとしている肝心の「独の文学」と本書との関係はどうなるのか。わたくしは、それは「第拾章　国民生活」の一節として本書七六九頁から七七六頁まで八頁に亘って掲載された「文学」、これが鷗外が井箆に交付した「独の文学」に当たるのではないかと考えるのである。

Ⅲ　『独逸之現勢』中の「文学」

署名がないのであるからこれを鷗外文であると断定することは極めてむずかしい。またこれはごくごく簡略なドイツ文学史の記述であり、筆者の個性を感じさせられるような内容の文章ではないので、この面から鷗外文の特徴を探ることもむずかしい。前述した再版本巻頭に掲げられた批評の中でも「政治国交及び物質的文明の記述の精細なるに比し独逸の最

も矜りとする精神的文明則ち哲学文学美術等の如きは殆んど其の上ッ面を撫で去れるに過ぎず政治家の著にして文芸美術を論ずる目的にあらざるを以て固より恕すべきと雖も理想として未だ全きものにあらざるは論なからん」（『やまと新聞』三月五日）と、文学美術面における簡略すぎる記述が本書の数少ない瑕瑾とされるぐらいである。

にもかかわらず、わたくしが後に「資料」として全文を掲げる『独逸之現勢』中の「文学」こそを、鷗外が「草」した「独の文学」ではないかと考えるのは、以下の理由による。

① 当の「独の文学」が本稿Ⅱ章までに述べてきた『独逸之現勢』の著者・望月小太郎（英文通信社）側からの接近の結果生み出されたものであると考えられること。

② この「文学」の節は確かに短く簡略な記述なのだが、そこには鷗外が翻訳等でしばしば取り上げる作家、作品が拾い上げられていること。

③ 本文中に訳者として「鷗外」の名が二箇所出てくること。

①に関しては既に確認したとおりである。

②だが、当該「文学」は、本文中で「古代文学」（本誌一八五頁。以下同様）とする「ニイベルンゲンの歌」、「ヒルデブランドの歌」、「グウドルンの歌」の三作品を記述した後、「而して真成の意義を以てする独逸文学は纔に端をクロップストック及びレッシングに開けり」（一八八頁）とする。クロップストックはさておき、レッシングは鷗外が一八八九（明治二十二）年十月に創刊した『しがらみ草紙』第一号に早くもその作品「折薔薇（エミリヤ、ガロッチー）」を翻訳掲載した作家だった。この作者に関わる「レッシングが事を記す」（『しがらみ草紙』一八九一・六～九）、「戯曲の翻訳法を説いて或る批評家に示す」（『国民新聞』一八九一・三・十八～二十一）という鷗外の仕事があること、周知の通りだ。そして③とも関わるのだが、レッシングの戯曲を紹介する際、「鷗外氏の嘗て訳せし所の『エミリア、ガロッチイ』及び『ピロタス』等あり」（一八九頁）として鷗外の名が出てくるのである。

さらに「クロップストック及びレッシングに次いで出で独逸クラッシシク文学の絶頂に達せしものをギヨオテ及びシルレルとす」（一八九頁）とこれまた鷗外が高く評価し、しばしば言及する作家二名の名を挙げる「文学」文は、ギヨオテに関する部分で「鷗外氏の訳せし所の『ギヨツ、』並に『フアウスト』あり」（一九〇頁）と再び鷗外の名を出すのである。

「訳せし所」と「文学」文は言うが、厳密に言うと、一九一二（大正元）年十月から『歌舞伎』誌上で連載が開始された「ギヨツツ」は、『独逸之現勢』刊行（一九一三（大正二）・一・二十八）当時はまだ連載途中であり（一九一四（大正三）年三月で完結）、単行本になるのは一九一六（大正五）年五月まで待たなければならなかった。「フアウスト」に関しても同様で、第一部は一九一三（大正二）年一月十五日に冨山房より刊行され、第二部刊行は同年三月二十二日のことだった。つまり『独逸之現勢』所収の「文学」文執筆時点（誰が書いたのかはひとまず措くとしても、一九一三年一月に刊行するためには遅くも前年の十二月までには書き上げていなければならない）では、まだ鷗外訳単行本『フアウスト』は誰も目にすることができなかったはずなのである。だが、翻訳し終わった時点ということで言えば、鷗外は一九一一（明治四十四）年十月三日にはすでに第一部の訳稿を完成し（「Faust第一部訳稿を校し畢る」「鷗外日記」）、続いて一九一二（明治四十五）年一月五日には早くも第二部までの全てを訳し終えていたのである（「Faustを訳し畢る」「鷗外日記」）。すなわち、一九一二年末の時点で「フアウスト」を「鷗外氏の訳せし所」と明確に言いきることができるのは、他ならぬ訳者・鷗外その人しかいないのだ。

さらに蛇足を付け加えるが、「文学」文は「此よりして現今の文壇に至るまでヂツトマルシエンの人ヘツベル及びマイニンゲンの人ルウドヰヒを除きては雄大なる著作其の跡を絶てり」（一九一頁）として、「ヘツベル」「ルウドヰヒ」の二人の文学者を高く評価するが、これは「文学その物の方で、近世最も注目すべき作者はどんな人達かといふに、Bartelsが推薦する通りに、先づ指をHebbelとLudwigとに屈せずばなりますまい」（「近世独逸文学一夕話」『白百合』一九〇四（明治三十七）・一、後『妄人妄語』（一九一五・二、至誠堂）収録の際に「近世の独逸文学」と改題）という鷗外文に正確に対応す

る。

また続く「ゲルハルト、ハウプトマン」（一九二頁）に関しては、「現今の作者となりますれば、誰が何と云つても、矢張りHauptmannが第一流の人物でございませう」（前掲「近世独逸文学一夕話」）と鷗外は言う。彼は一九〇六（明治三十九）年十一月春陽堂刊行の『ゲルハルト・ハウプトマン』の著者でもあった。

最後に抒情詩人として「唯リツヒヤルドデエメルの一顧する足るあるのみ」（一九二頁）とするのも、同じく「現今の抒情詩人となると、一寸誰を推薦して好いか分かり兼ねますが、Dehmelの小い集が一冊出来てゐますから、あれを見て略ぼ時代の風潮を推することが出来ませうかと思ひます」という、これまた「近世独逸文学一夕話」中の鷗外の発言に符合する。その鷗外はそうした自身のデエメル評価を裏書きするように、「ドイツの抒情詩は、先づ方今第一流の詩人として推されてゐるデエメルの最近の詩集から可なりの数の作」（「「沙羅の木」の序」）を取って訳出（全九編、『我等』一九一四（大正三）・二）、詩集『沙羅の木』（一九一五（大正四）・九、阿蘭陀書房）の巻頭に据えたのだった。

＊　＊

以上述べてきたように、わたくしは望月小太郎著『独逸之現勢』「第拾章　国民生活」中に収められた「文学」の節こそ、一九一二（大正元）年十二月二十日の「鷗外日記」に「草」したと書き留められた「独の文学」に他ならないと考える。先に紹介した『やまと新聞』評ではないが、政治家望月小太郎にとって専門外の「文学」は、いくら簡略で大まかな見取り図に過ぎないとはいえ（否、大まかな見取り図であるが故により一層と言うべきかも知れない）、手を付けかねる分野だったのではないだろうか。同じことは「文学」の次節に置かれた「美術」（同書七七七頁―七八四頁、八頁分）、次次節に置かれた「音楽」（同七八五頁―七九二頁、八頁分）についても言えるはずであり、これらもおそらくは誰か日本の専門家の手に委ねたのではなかったろうか。

ではなぜ実際の執筆者の名前を出さなかったのか、推測に推測を重ねるようなことは慎まなければならないが、本書に

はドイツ人の寄稿に関しては実名が記され、それらは三十人の多きを数える（「第十三章　日独国交と両国識者の意見」に掲載されたドイツ側の識者二十一名を加えると全五十一名）のだが、日本人の名は一名も記されない。前述した第十三章の日本側の識者十三名を除いて。つまり「記名せざるものは皆著者の別観所説にして敢て浅学薄識を顧みず、刻苦黽勉以て本書を編成せり」（「自序」）というスタイルが貫かれているのである。それが衆議院議員望月小太郎の姿勢だったのだろうか。

もちろん以上本稿で検討してきたことが、いわば状況証拠に過ぎないものであることはわたくしは重々承知している。繰り返すが、署名のない文章を鷗外のものだと断定するには決定的な証拠が足りないことも承知している。仮にわたくしの推定通りだとしても、鷗外が井箆節三に渡した「独の文学」に、望月が手を入れた可能性だって否定できない（これは当時の「森鷗外」という文学者としての位置を考えると考えにくいが）。しかし以上の検討を踏まえた上で、鷗外が間違いなく「草」した「独の文学」の着陸点として、『独逸之現勢』所収の「文学」を想定することは許されないだろうか。[2] すなわち、それは鷗外執筆の蓋然性の高い文章として、『鷗外全集』の片隅、「参考篇」の一隅にでも収めておいていいものなのではあるまいか。

大方のご批正を仰ぎたい。

注

（1）　望月小太郎は一八六五（慶応元）年十一月甲斐国巨摩郡身延村生まれ。山梨県師範学校を経て慶應義塾を卒業し、一八九一（明治二十四）年英国に留学、ミッドル・テンプル大学法科を卒業した。卒業後も同地に留まり『日英実業雑誌』を発行し、日英同盟

を力説。欧州諸国を視察して帰国後、一九〇二（明治三十五）年山梨県より衆議院議員に当選、以来連続七期議員を務めた。初め立憲政友会、一九一五（大正四）年以降は立憲同志会・憲政会に所属。その間日露戦争後、外国の日本に対する誤解を解くことを目的として英文通信社を創立し社長となり、『日韓英文通信』『英文財政経済月報』を発行、欧米諸国に日本の事情を紹介することに努めた。一九二七（昭和二）年五月九日没。（『日本人名大事典』（一九三八・十、平凡社）、『日本史大事典』（一九九四・二、平凡社）等参照）

（2）　同様の種類の文章として、鷗外が、一九一六（大正五）年三月十二日、日本百科大辞典完成会発行、三省堂発売の『日本百科大辞典』第七巻収録の、「独逸の絵画」「独逸の彫刻」二編を担当していることを指摘しておきたい。

ただし、こちらはそれぞれ文末に「〔森（林）〕」の署名がある。

文學

獨逸の文學を詳細に叙述し、其の價値を批評するが如きは文藝上の著述にあらざる本書の目的にあらず。故に此處には獨逸文學の歴史及び現況中より最も重要あるもの二三を抽いて之を紹介するに止めんとす。

紀元八〇〇年を以て羅馬帝の冠を戴きしカルヽ大帝は獨逸封建制度の開祖あり。此の大帝の時代以前の文學は所謂古代文學にして、『ニイベルンゲンの歌』、『ヒルデブランドの歌』及び『グウドルンの歌』最も著はる。

此の中『ヒルデブランドの歌』は紀元八〇〇年前後の寫本を以て傳はりたる斷片あり。其の内容は東ゴオテン王テオドリヒの事蹟に連繫す。テオドリヒの父テオデッサルに逐はれオドワカルが匈奴王エッチエルの幕賓たるや、ヒルデブランドと友とし善かりき。ヒルデブランドは曩に鄕を去るに臨みて、三歳の男子を遺留せしに、其のオドワカルと倶に還るや、兵を率ゐて之を國境に要するものあり。是れ遺留せし所の我子ハヅブランドあり。ヒルデブランドは喜びて己の父あることを告げ、匈奴王の贈る所の寶刀を

與へんとす。ハヅブランドは父の去就を屑しとせず、槍を執つて戰を挑めり。子は遂に敗死せり、(又一説には我子の命を助けたりと)

次に『ニイベルンゲンの歌』は西ゴオテンの事蹟と連繫し、これにラインフランケンの『ジイグフリイド』傳説を附會したるものあり。歴史には四三七年に東ゴオテンに滅されしグンダハリと稱する王ありて、ライン河畔のヲルムスに都したりき。此グンダハリを歌中にはグンテルと曰へり。グンテルに妹クリイムヒルドあり。歴史上には匈奴王アチラの夫人となりたり。歌詞に從へばクリイムヒルドの初の婿をジイグフリイドと云ふ。グンテルはイヽゼンランドの女王ブリユレヒルデを娶るに婿の力を借り、之に酬ゆるに妹を以てす。然るに兩婦相容れず、グンテルは其臣ハアゲンをしてジイグフリイドを刺さしむ。クリイムヒルド去りて身を匈奴王エツチエルに委ね、其力を借りてハアゲンを殺す。此より兩家相爭ひ、彼我皆鋒鏑に殪れて遺蘖おきに至る。

次に『グウドルンの歌』は十三世紀の前半に墺國及バイエルンの詩人の手に成り、世に傳ふる所の一本はマクシミリアン一世の寫さしめたるものに係る。一八二〇年に之をチロオルの古城に發見せり。其内容はスカンヂナヰアの海賊ヰキンゲルの事蹟に連繫す。イルランド王ハアゲンと妃ヒルデとの間に母と名を同じうせる女王ヒルデあり。デヲマルク王ヘツテルに嫁し、グウドルンを生む。ゼエランド王ヘルヰヒ之を娶らんこ

とを請ひて聽さる。然るにその合晉の期に先だち、ノルマンヂイの王子ハルトムード、グルウドンを奪ひて國に歸れり。ヘルキヒ軍を起してノルマンヂイに侵入す。グウドルンは操を守りて從はず、奴婢の待遇に甘んず。ヘルキヒのノルマンヂイに上陸するや、海邊に二少女の衣を洗ふを見る。是れグウドルンと婢ヒルデブルグとあり。ヘルキヒは城を攻めてハルトムウトの父ルウドキヒと母ゲルリントとを殺し、グウドルンの請に依り、ハルトムウトの命を免す。

以上の三種に共通せる思想は一種の武士道にして只其の製作の年代に伴ひて多少の變遷あるのみ。『ヒルデブランド』及び『ニイベルンゲン』より進んで『グウドルン』に入るときは、剛健一味の氣象は變じて隱忍溫和の風を爲し、其の間に基督教の感化を認識すべし。此氣風の更に進んで釀し出したる所のものを『ハインリヒ物語』及『バルチフアル物語』とす。

『ハインリヒ物語』は十二世紀末の詩人ハルトマン、フオン、アウエの作に係る。シユワアベンの古傳說にハインリヒと云ふものあり。名門に生れて癲病に罹れり。伊太利の醫師處女の心血を得て之を治せんと云ふ。一少女自ら薦めて死に赴く。醫師の少女の胸を剖かんとするや、ハインリヒ之を見るに忍びず、意を決して少女の命を救ひ、此より信者となり、惡疾も亦癒えたり。近ごろゲルハルト、ハウプトマン此物語に本づいて脚本

を作り、ヘッベルが作る所の『ニイベルンゲン』の脚本と倶に世に行はる。

『バルチフアル物語』は同じく十二世紀末に出でし詩人ヲルフラム、フオン、エッシエンバハの作に係る。其内容はアルツス傳說の一部に屬す。テンプライゼンの城に耶蘇基督の血を承けし神器グラアルあり。アンフオルタス王之を奉ず。王老いて病めり。バルチフアルは其職を襲ぐべき宿因ありと雖血氣未だ定まらず、城に至る時王の病を問ふことを怠り、一たび城中より逐はれ、後身を修め德を養ひて再び城に入る。其子にロヘラングリンあり。ワグヲル曲中のロオングリン是なり。

此より後、中世の文學は萎靡振はず、互に相蹈襲す。マルチン、ルーテル（一四八三―一五四六）の起るに及び獨逸の文學は始て標準を得て、其基址鞏固なるに至れり。ルーテルが聖書を翻譯する時用ゐし新高獨逸語即ち是なり。然れども文物の隆興は歲月に待つあり。十八世紀のフリドリヒ大王の如き、猶自國の語を喜ばず、一切の簡牘述作佛語を以て文を行り、佛國の亡命の學者を集へて衒耀の具とおす。而して眞成の意義を以てする獨逸文學は纔に端をクロップストック（一七二四―一八〇三）及びレッシング（一七二九―一七八一）に開けり。クロップストックは長篇叙事詩『メッシアス』を作りて、始て獨逸語の必ずしも措辭の莊重を害せざるを證明したり。其の材は之を基督の事蹟に取る。今や世人此の冗漫の調を厭ひて復之を讀まずと雖、當時著先の功は終に沒すべからざるものあり。レッシングは製作と批評との才を兼備し

藝術的趣味極めて饒かありしを以て、其の事業前者と同日にして語るべからず。レッシングはザックゼン領内カメンツの人にして、マイセンの學習院に學び、ライプチヒ大學に於て卒業す。一時將軍タウエンチエンに從ひてブレスラウに駐まり、記室の職を執ると雖、生涯主として著述を以て口を糊したり。只晩年ヲルフエンビユッテルの圖書館長として稍堅固なる地位を占めたりしのみ。著す所の評論『ラオコオン』は詩歌と繪畫との範圍を辨じたるものにして、今よりして之を論ずれば立言偏頗の嫌ありと雖、其の簡勁なる散文と鋭利なる論理とは他人の追隨することを許さず。脚本には獨逸社會劇の嚆矢たる『ミス、サラア、サンプソン』、ボヨオテの『イフイゲニイ』と倶に人道主義を皷吹したる『ナタン、デル、ワイゼ』鷗外氏の嘗て譯せし所の『エミリア、ガロッチイ』及び『ピロタス』等あり。

クロップストック及びレッシングに次いで出で獨逸クラッシシク文學の絶頂に達せしものをギヨオテ(一七四九—一八三二)及びシルレル(一七五九—一八〇五)とす。ギヨオテはプロイセンの大都會フランクフルトの人、父は法學士にして帝國評議官の稱號を有したりき。ギヨオテはライプチヒ及びストラアスブルヒの大學に入り法律を學びワイマル公爵家に招聘せられて國務大臣となる。當時獨逸諸邦はナポレオン一世の威壓を受けて、東に墺國あり、北に孛國あり其間に介在するもの皆去就に迷ひたりしに、ギヨオテは年少氣鋭なるカルル、アウ

グウスト公爵を輔佐して、大いに合縱の策を盡せり。不幸にして孛國の乘ずる所となり、其の業中道にして壞ると雖、ギョオテが識見の濶大なる欽仰するに足るものあり。獨り文藝界に雄視せのみにあらざるなり。シルレルはウユルテムベルヒの士官の子なり。父は外科醫なりしに、其業行はれざるが爲めに見習士官として從軍し、後少尉に任ぜられて罷む。シルレルはウユルテンベルヒ領内マルバハに生る。ルウドヰヒスブルヒの拉丁校に學びソリチユウデのアルルスシユウレに移り、法科よりして醫科に轉せり其の卒業して榴彈兵聯隊の見習醫官となりし時、劇詩『群盜』は早く既に脱稿せられたりき。既にしてシルレルはカルル、オイゲン公爵の著作を禁せしが爲めに亡命し、後ギョオテの推擧に依りてワイマルに仕ふるに至るまで、放浪生活を營めり。其のギョオテとの交は文士間に稀に觀る所なり。

ギョオテが著作には小說『若きヱルテルの愁』あり。ナポレオン一世は埃及を征せし時、此の書を車中に藏して相隨へたりと云ふ。叙事詩には『ヘルマン、ウント、ドロテア』あり、脚本には『エグモント』、『イフイゲニイ』及び鷗外氏の譯せし所の『ギョッ、』並に『ファウスト』あり。

『ファウスト』は第一部及第二部より成れる韻文脚本にして惡魔と訂約したりと稱せらるゝ學者を主人公とす。名を『ファウスツス』と云ふ。幸福者の義なり。十五世

紀末に生る。其の性行奇僻にして一時を欺瞞せり。宗教改革運動の起るや著作家藉りて以て新教の一分派たるメランヒトンの徒を攻撃する具とおせり。フアウストは即ちルーテルの敵あり。ギヨオテは資料を此に取りて自家胸中の不平を寄托す。筆を第一部に下せしは青年時代ありしに、十九世紀の初八十餘歳にして始て第二部を完結せり。蓋し『フアウスト』は即ちギヨオテが自叙傳にして其の人生觀は總べて此の中に披瀝せられたり。

シルレルの脚本には『群盜』よりして外『オルレアンの少女』『ワルレンスタイン』『キルヘルムテル』等あり。シルレルは幼きよりジヤンジヤツク、ルソオに私淑し自由を愛し壓制を憎みしを以て其の著作も亦概ね壓制と自由との葛藤を主題とす。『キルヘルムテル』は其の代表作とおすに足る。彼のギヨオテが革命を惡むこと讎敵の如くありしと頗る其の歸趣を殊にせり。『クラツシツク』文學に次いで起りしものをロマンチツク文學と爲す。シユレエゲル兄弟チイク、ノワリス、アイヘンドルフ、クライスト、ジヤン、ポオル、ハイネ、ウウランド等皆此の中に包括することを得べし。此等の人物は想像の豐富なる文章の巧緻なる觀る可きもの少からずと雖、要するに强弩の餘勢のみ。此よりして現今の文壇に至るまでヂツトマルシエンの人ヘツベル及びマイニングンの人ルウドヰヒを除きては雄大なる著作其の跡を絶てり。

キルヘルム一世の佛國に勝ちてより歐州政治の中心獨逸に在りと雖、此間に立ちて文學上世界の視聽を動かしたるものは、未だ之を聞くに及ばず。自然主義の佛國に胚胎するに至りてシュレエジエンの人ゲルハルト、ハウプトマン非職士官にして旅店の主人たる一倉父の子に生れて『織匠』以下の寫實脚本、『沈鐘』等の象徴戯曲を著し、彼の爲めにキルヘルム二世の怒を激したるは猶目前の事實に屬す。今や獨逸の脚本界にはキルヘルム、シュミットボン、ブランク、エデキンド等の才人おきにあらずと雖、之を同文國墺太利のフオゴオ、フオン、ホフマンスタアル及びアルツウルシュニツツレルあるに比すれば稍寂寞の觀あり。ハウプトマンは近ごろ筆を脚本に絶ちて小説の作に從事し既に二三の長篇を公にし其の『アトランチス』は今年クリスマスの市に上るべく『テルマク』も亦早晩印行せらるゝに至るおらん。其他抒情詩には新舊兩派の限界線に立ちたりし非職騎兵少佐リリインクロオン死して唯リツヒヤルドデエメルの一顧する足るあるのみ。